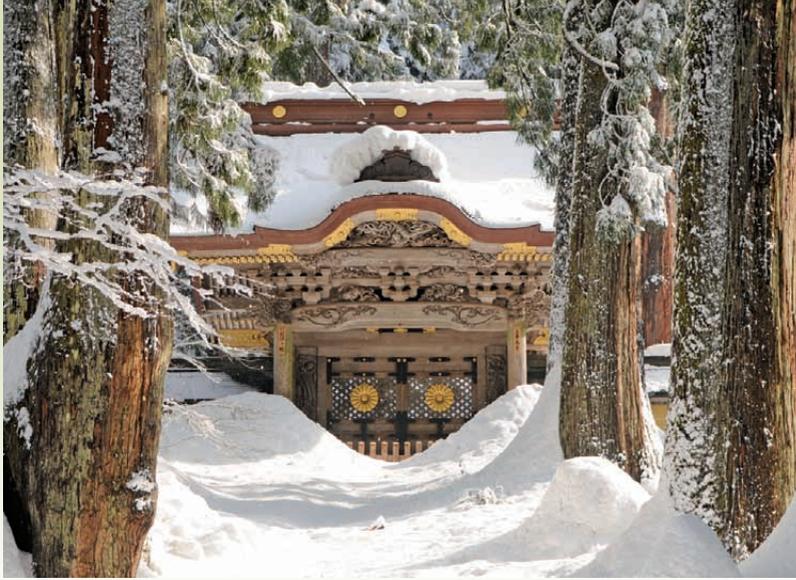




大本山永平寺



冬支度

集団生活をする私たちの冬の課題は「予防」です。

通常の風邪でも感染しやすい環境ですので、インフルエンザには一層の予防を心がけなければなりません。この時期は修行僧に予防接種が行われます。

健やかに修行を進めていくには「自己管理」が必須です。誕生から青年期にかけては保護者に面倒をみてもらい、その健康を保ってきましたが、修行道場においては自らこれを行わなければなりません。体調と精神状態を観察することが自己管理の基本であります。

さて、今月下旬は来る冬に備えて雪囲い作務を行います。

冬の永平寺は気温の低さに加え老杉が日差しを遮ります。新雪が根雪となり積雪量は増すばかりです。深山幽谷に降る雪はとて美しく見惚れますが、同時に豪雪地帯にとっては「脅威」となります。

伽藍や植物の損傷を避けるためには、必ずこれを勤めなければなりません。

降っては積もり、積もっては降る日々が間もなく訪れようとしています。



瑩山禪師の降誕会ごうたんえ

今月二十一日は總持寺を開かれた瑩山禪師の降誕会、つまり誕生日です。この日は大祖堂で江川禪師御親修にて、ご誕生をお祝いする法要が営まれます。

ご誕生の様子は、瑩山禪師ご自身の自叙伝である『洞谷記』とうこくきという書物に詳しく述べられております。それによりますと、瑩山禪師は今から七四八年前の文永元（一二六四）年に越前国・多禰村（今の福井県越前市）の観音堂敷地でお生まれになりました。

そのときお母さまは三十七歳。当時としてはかなりの高齢出産でした。お母さまはお腹の子が無事にこの世に生まれてくるよう念じ、毎日十一面観音像を礼拝し観音経を読まれました。そして臨月近くに観音堂へお参りする途上で、産気づかれてお産みになり、幼名を「行生」ぎやうじやうと名付けられました。このようなお母さまへ、瑩山禪師は並々ならぬ孝順心を抱かれました。

本山では単に瑩山禪師のご誕生を祝うだけでなく、「お母さまへの孝養」にも想いを馳せて法要をお勤めします。降誕会が終わると、いよいよ臘八ろうはつせっしん摂心の時節となります。

遠花火施設住まひの妻如何に

群馬県 山本 俊久

評 小さな音と共に遙かな空に美しく消えては咲く花火。人生を共にしてきた妻は施設に居る。多くの解説はいろいろな。

「遠花火」に万感の思いがこもる。

遠泳の賞状昭和十二年

三重県 山下 利夫

評 昭和十二年は盧溝橋事件が起き日中戦争・太平洋戦争への口火となった年。諸々の体験の人生。この賞状も感慨深い思い出を伴う青年期の輝く証なのだ。

◆ 百円をいかに使わん夏休み

和歌山県 田崎よし子

◆ 五輪の火消えたる夜の門火かな

福島県 伊東 伸也

◆ 夏休み体験学習坐禅の子

長野県 下島 博

◆ 亡き父母の夢の中なる菊枕

岩手県 上沖 貞子

◆ 梅雨明けて鏡大きく拭きにけり

愛知県 田中 澤子

◆ 諸縁放下ひとり静座の秋立ちぬ

福岡県 安部 正和

◆ 雉子鳴き余震無き日のなかりけり

岩手県 関合 新一

◆ 通り抜けできぬ裏路地ラムネ玉

東京都 伊奈 三郎

◆ 病棟に匙音聞こゆ今朝の秋

東京都 藤橋 眞子

◆ 八十路なほ主婦といふ座の生身魂

北海道 大野 節子

*選者吟

旅衣とはアノラック芭蕉の忌

五灰子

*作句小見

毎号たくさんのご投句ありがとうございます。比較的高齢の方が多くそれだけに人生の機微に触れた、しみじみとした味わいの句に感動したり、「眼から鱗」のような句に出会うこともあります。選者冥利と感謝しております。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

カメといふあだ名の吾子も成長し亀にくは
しい理科の先生 岐阜県 後藤 進

評 あだ名がカメというくらいだから、ものごとをじっくり
考えて行動するタイプの子だったのだろう。長所が生かされ
今や理科の先生と詠う。いじめの問題で揺れる教育の現場、
この一首のように大らかに子等の成長を見守りたいもの。

山百合が咲き時鳥啼きつげど牧場に牛のお
らぬは哀し 宮城県 鎌田登喜子

評 東日本大震災の何らかの影響を受けた牧場と思われる。
牛のおらぬ牧場の背後には、やむを得ず牧場を去った人びと
の窮状が窺える。それも含めた結句「哀し」であろう。

◆ 二百人の僧の読経のかたまりの真中まなかを割って仏を拝す

◆ 夜明け待ち採りたる桃を詰めし箱明日は東京の市場へ入
る 大阪府 西口 節子
福島県 大波シユク

◆ ふりむきて見る人もなき道祖神み手を取り合い夏草の中
静岡県 土屋 君江

◆ 山の上に位置定めたる人道雲坐して動じぬ雲水の姿すがた

◆ 「だるまさんが転んだ」の子に混じり猫のさつきもわれ
に近づく 山口県 横川美代子
福島県 大槻 弘

◆ 石垣に海星うみほしが数多はりつきて海辺の岸を飾るがごとし
北海道 吉田 洋子

◆ 菩提寺の結界近くの墓地に咲く百日紅の赤迎え火となれ
三重県 小阪 晋

◆ 七夕の漫ろ歩きの思い出は波に攫われ沈んでおりぬ
宮城県 島山 恵

◆ 吾が膝に眠る曾孫の身動きに合わせて吾も傾いてゆく
愛知県 深谷ハネ子

◆ 異次元の世界に誘はれゆくごとく動く歩道に一人立ちを
北海道 佐賀 ユリ

*選者詠

久々に会いたる甥っ子十歳なり目差し影濃
く母を見上げる ちづ

*作歌小見

九月になっても盛夏と変わらぬ高温がつづき、暑い暑い夏
でしたがいかがお過しでしたか。高齢の方が多く投稿してく
ださる曹洞歌壇、皆さまのご体調を案じましたが、今月も多
くお寄せくださいました。土屋君江さんは九十二歳の方です。